



未曾有の災害に際会した日

# 咆哮し 襲い来る 大津波

2011年3月11日、春の到来が待たれる季節だった。この日、午後2時46分。日本で近代的な地震観測が始まって以来最大規模の超大型地震の発生。そして大津波の襲来。大切なものが一瞬にして奪われていく未曾有の災害を、誰が想定しえただろうか。誰もがその現実を受け止められずにいた。あれから10年。確かに町は再建に向けて復興してきた。しかし、あの日何が起こったのか。あの日どれだけの挫折と絶望を感じながら、それでも前に進み続けようとしたのか。残された者は語り継いでいかなければならない。伝え続けていくことで、「津波の犠牲のない町、山田」に近づいていけるのである。

## 山田町の概要

山田町は陸中海岸のほぼ中央に位置し、北部は宮古市津軽石地区、南部は大槌町、西部は宮古市川井地区と接し、東部は太平洋に面している。

町内で発掘された遺跡や遺物から、約6500年前の縄文時代早期には大規模なムラがつけられ、古代から人々の生活が営まれていたことが分かる。

明治22年(1889)、市町村制が実施され山田村・飯岡村の2村、豊間根村・石峠村・荒川村の3村がそれぞれ合併し、山田町・豊間根村・大沢村・織笠村・船越村の1町4村となる。その後、昭和30年(1955)、1町4村が合併し、現在の新しい山田町が誕生した。

山田湾中央に「オランダ島」と呼ばれる大島がある。東北唯一の無人島海水浴場で、平成15年(2003)、環境保全と公共利用を目的に山田町の所有となっている。

湾の北部にはかつて捕鯨基地があり、捕鯨の町としても知られていた。

しかし、IWC(国際捕鯨委員会)の商業捕鯨規制により昭和63年(1988)、町の捕鯨は閉幕となった。



市場での評価も高い殻付きカキ

た。一時代を築いた証しとして、世界最大級のマッコウクジラの骨格標本が「鯨と海の科学館」に展示されている。

山田湾と船越湾に挟まれた船越半島は、海岸性原生自然の景観に優れ、その価値は学術的にも高く、本州に残された最後の秘境とも称され、昭和30年(1955)には国立公園に指定されている。震災後の平成25年(2013)



オランダ船プレスケンス号の入港後に描かれたオランダ船入津の図(「南部領内総絵図(正保国絵図)控」より・盛岡中央公民館蔵)



山田湾と山田中心市街地を望む(震災前)

には青森県、宮城県それぞれの一部とともに三陸復興国立公園となっている。

豊かな自然に恵まれた山田町ではあるが、歴史の中では幾度も大津波に遭遇し、そのたびに町は大きな痛手を負いながらも再建を果たしてきた。

過去の災害から学び、明治29年(1896)の津波被害が大きかった船越地区や、昭和8年(1933)の震災後には田の浜地区が集団で高台移転をするなど、それぞれ対策を実施してきた。さらに津波を防ぐため防潮堤を設置するなど、町では防災に向けたさまざまな対策を講じてきたが、平成23年(2011)に発生した東日本大震災では、三陸海岸一帯に防潮堤を越える規模の大津波が押し寄せ、大きな被害をもたらしたのである。



シイタケ栽培などの農林業も盛ん

## 三陸と山田町 の海嘯史

遺跡発掘調査で見えられた縄文遺跡はほとんどが高台に位置している。このことから、その頃の人びとは高潮や津波を警戒し、海に近い低地ではなく高台に生活の拠点を置いていたのではないかと、縄文時代を研究している考古学者は語っている。

三陸地域は過去、幾度も津波の被害

を受けてきた。古くは「貞観地震津波」「慶長三陸地震津波」「明治三陸地震津波」。そして昭和以降に発生した「昭和三陸地震津波」「チリ地震津波」、記憶に新しい「東北地方太平洋地震」などがある。この東北地方太平洋沖地震は政府によって「東日本大震災」と名づけられ、日本で近代的な地

震観測が始まって以来、最大規模の超巨大地震であった。このようにこの地域は大地震・大津波の発生に見舞われてきたのである。

### 貞観地震津波

貞観11年5月26日(869年7月13日)、三陸はるか沖を震源にマグニチュード推定8.3の地震が発生、それは夜のことであった。この時の様子を伝えている「日本三代実録」によると、「陸奥国に巨大地震、津波が発生。人的被害は溺死者1000人、圧死者不明。物的被害は家屋の倒壊、多賀城の城郭・倉庫・門・櫓・築地塀の倒壊、広大な津波浸水被害であった」とある。残されている唯一の資料と言われ、明らかにされていない点も多いが、「海を去ること数百里、原野も道路も大海原と化した」とあることから、この地震による大津波で現在の山田町が被害を受けたことは想像できるが、岩手県下での程度の被害があったかは不明である。

### 慶長三陸地震津波

徳川幕府が開かれた江戸時代、慶長

16年10月28日(1611年12月2日)、慶長三陸地震が発生。地震から約30分後の午後2時頃、津波が押し寄せ多くの家屋が流失し、犠牲者が出た。この日は朝からたびたび地震があり、大音響とともに大波が押し寄せ川を遡上。引き波で多くの家屋が波にのまれていったとある。現在の山田町(旧山田村、旧船越村)の地震の規模は震度2.3。無感の地域もあったとされることから、この津波はいわゆる「津波地震」によるものとみられている。津波地震とは、人に感じられる揺れが小さくても、発生する津波の規模が大きくなる地震を指す。

山田、田老で25メートルを記録したこの津波による犠牲者は3000人。うち山田町は20人・船越村50人との記録もあるが、詳細は不明である。

三陸沖地震と言われていたこの地震は、近年に行われた調査から震源域が三陸沖にとどまらず、北海道の十勝沖から根室沖、さらには北方領土の択捉島まで連なったプレート境界地震であったと考えられている。

### 明治三陸地震津波

慶長三陸地震から300年近く経た明治29年(1896)6月15日、午後

7時半ころ、三陸の沖合で地震が発生した。記録に残る地震の規模は震度4。体に感じる揺れは弱いものであったと言われ、この揺れによる被害はほとんどなかったとされている。しかし、地震から30分くらいたったころ、地域一帯が大津波に襲われたのである。後に津波地震の典型例とされた。三陸一帯の被害は、波高24・4メートル、犠牲者数1万8158人、家屋の流失4801戸、家屋倒壊726戸。うち山田町の死者は2950人、負傷者



昭和初期の山田湾の様子

は約370人。家屋の流失や全壊など多くの被害を受けている。

### 昭和三陸地震津波

三陸沿岸は貞観11年(869)から昭和8年(1933)の間に21回もの地震による津波に襲われている。高台の山々に雪が残る肌寒い昭和8年3月3日、午前2時31分、三陸沿岸は強い揺れに見舞われた。昭和三陸地震である。観測された揺れは震度5。人々の体感として3分ほど続いて2回の揺れがあったが、3回目以降揺れは小さくなっていった、とある。さらに三陸の人々には、「冬の季節と晴天に津波はこない」という言い伝えがあり、こうしたことから地震のあとでも深い眠りにあった人々も多かったという。

震源地は三陸沖日本海溝付近で、三陸から沖合に200キロほど離れていたが、そのエネルギーは、マグニチュード8.1と大きく、規模としては巨大地震であった。

地震発生後、「大砲を打ったような」異常な音響が各地で確認されている。海岸で聞かれたというこの音は津波が海岸、断崖に打ち当たった音ではないかと当時の人々は思ったという。明治三陸地震の教訓から、「津波が

明治三陸地震津波と比較して深夜だったにもかかわらず山田湾内で犠牲者が少なかったのは、過去の体験と教訓が生かされたことではあったが、加えて、「町を救った交換嬢の機転」があったと、当時の岩手日報がこの日の電話交換手の機転を伝えている。この日、山田郵便局の当直だった3人の電話交換手が、大槌郵便局から津波が来そうだとこの報を入手。電話からかすかに聞こえる「津波だ!」津波だ!」の声に3人は、町の電話加入者1000余名の家全戸に津波の来襲を連絡。これを聞いて町民はすぐに高台に避難し難を逃れることができたという。

街は南町(現中央町)半分より南方境田まで全壊流失した。津波に襲われた後しばらくは人通りも少なく、家々の電気も所々に付くだけの寂しい街並みだったという。

この震災以降、津波に関する調査研究が多く行われるようになった。その結果に基づき復興計画が立てられ、三陸沿岸における津波防災の骨組みがつけられた。3カ月後の6月には、文部省(現文部科学省)震災予防評議会、津波予防に関する「注意書」により、護岸、防潮堤など10項目の予防対策が提案された。中でも高台移転は強く推奨されていた。被災地では集団による高台移転なども行われたが、さまざまな



昭和三陸地震津波による山田町の惨状

問題から海沿いの低地に戻るケースも少なくなかった。

### チリ地震津波

津波といえば、大きな地震に伴って起こるもの、というのが一般的に考えられていることではないだろうか。過去に三陸沿岸を襲った数度の津波も、全て三陸沖で発生した地震によって引き起こされている。ところが昭和35年(1960)の津波は違った。



昭和8年3月3日津波による死者、家屋流失倒壊図



〈津波記念碑〉  
山田町船越大浦「大海嘯記念」昭和九年五月建立

〈表〉  
— 大地震の後は津波が来る  
— 地震があったら高い所へ集まれ  
— 津波に追はれたら、何処でも此所位の高い所へ  
— 遠くへ逃げては津波に追付かる  
— 近くの高い所を用意して置け  
— 県指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

〈裏〉  
昭和八年三月三日午前二時三十分上下二動揺スル強震アリ  
續イテ三時頃ヨリ大音響ト共二大津浪ノ襲来アリ  
浪ノ高十米三時十分頃最モ被害アリ  
被害戸数船越區流失二十三戸半潰一戸死者三名  
田ノ濱區流失百八十三戸半潰二戸床上浸水十一戸死者二名  
大浦區流失五戸半潰十四戸床上浸水十六戸ナリ

来る、逃げる」という人の一方で、揺れに飛び起きたものの、海岸が何ら異変もないことから再び眠りに就いた人もあったとされる。しかし、牙をむくかのように地震の発生から30〜50分後に高さ3〜8メートル、高いところで

28・7メートルの津波が来襲し、瞬間に沿岸一帯をのみ込んだ。被害は死者1823人、行方不明1140人、家屋の流失倒壊6837戸。うち山田町の犠牲者は7人、流失と全壊は320戸。

5月23日、午前4時11分(日本時間)、南米チリでマグニチュード9.5という観測史上最大の地震が発生した。日本から見て地球の裏側にあるチリでの大地震。誰が地球を半周し大津波となつて太平洋沿岸に到達すると想像しえたであろうか。津波は、地震発生からおよそ23時間かけて日本の沿岸に到達。その勢いは衰えることなく三陸海岸を襲った。山田町では午前3時5分、海上にいた人が異変に気付いている。第1波午前2時半ころ、第2波が3時ころ、そして第3波が押し寄せた4時24分過ぎには、水かさが増し、見る間に護岸を超えている。

られ、遠方で発生した津波が伝播してくる「遠地津波」に備える、現在につながる体制が構築されたのである。三陸沿岸はリアス海岸で、岬と入り江が複雑な海岸線となっている地形が、被害を大きくする。中でもV字型の入り江に入り込んだ津波は、両岸が狭くなるため波がより高くなるのである。幾度も津波被害に遭遇してきたこの地域では、町を守る防潮堤や防波堤、そして先人たちが命を守る願いを込めた津波記念碑などが多く建立されている。

被害は、北海道から沖縄に至る太平洋沿岸ほぼ全域に及び、全国で死者139人、家屋の流失全壊2830戸、半壊2183戸、浸水3万7195戸と甚大であった。特に三陸海岸では、波高8メートルを超えたところもあり、死者が岩手県大船渡市で53人、宮城県37人という数に見るように、三陸に集中している。幸い山田町では、死者はなかったが家屋の流失、全壊、床上床下浸水などの被害があった。

この津波では、警報の遅さが指摘された。気象庁からの警報は、三陸沿岸が数回もの津波に見舞われた後の午前5時20分であった。こうしたことから日本も太平洋津波システムに組み入れ



チリ地震津波での被害

# 東日本大震災発災 地震と津波の規模

これまで三陸沿岸は、人も町もどれだけ地震による津波被害を受けてきただろうか。

そのたびに人々は、知恵を結集し復興し、自然はまたそれを一瞬にして破壊。けれども人々はまた立ち上がって震災に負けない新しい町をつくり、その繰り返しで生活が営まれてきた。

高度な技術発展による防潮堤などもあるが、物質的文化的発展の一方で、地震や津波を正確に予測することは、現代の科学をもっても難しい。

それは、不意をつかれて突然やってきた。

佐藤信逸山田町長は言う。

「突然に尋常じゃない揺れに見舞われました。一瞬にして慣れ親しんだ町をこの世の地獄に変えました。当時、数日前から地震が頻発していて、中でも2日前の3月9日、午前11時45分に起こった震度4の地震が大きかったと記憶しています。この日も間もなく津波注意報が出されましたが、それほど

大きなものではなく事なきを得ました。ちまたでは最近地震が多いね、と声が聞かれていました」

強い揺れだったにもかかわらずそれほど大きな津波ではなかった、ということに安堵した町民が多かったのである。まさか2日後に襲われる震災が、この穏やかで美しい町に深い悲しみと途方もない喪失感をもたらす震災になると、誰が予想しえたであろうか。

平成23年（2011）3月11日、午後2時46分。三陸沖・牡鹿半島の東南東約130キロメートル付近を震源に、東北地方太平洋沖地震が発生。

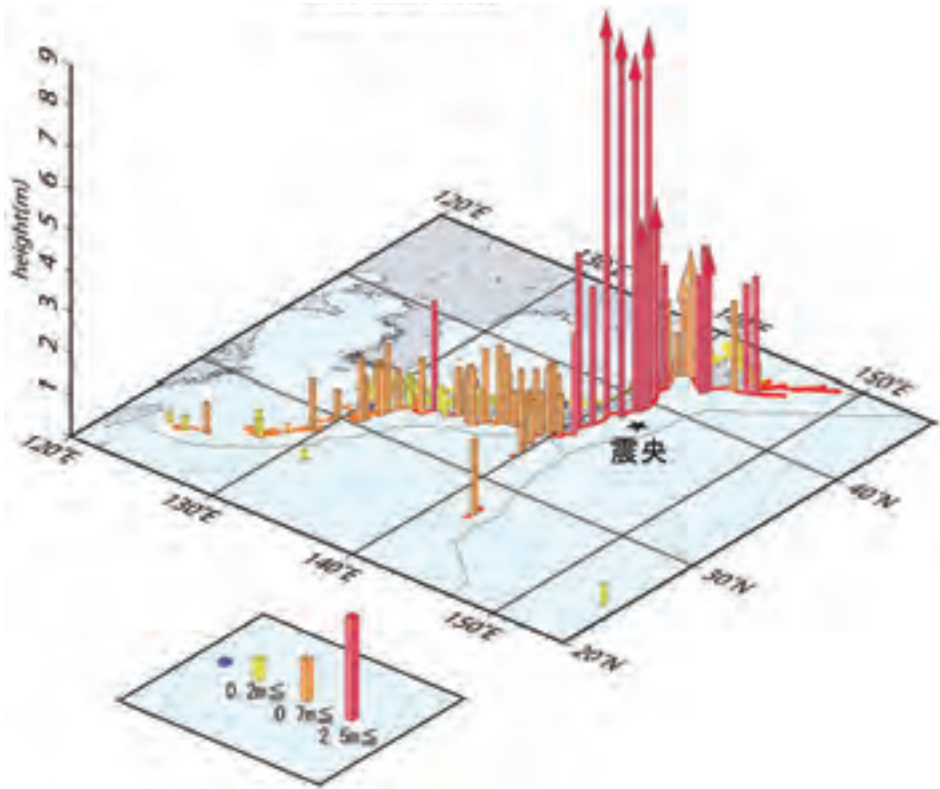
その範囲は、岩手県沖から茨城県沖に至る長さ約450～500キロメートル、幅約200キロメートルに及びマグニチュード9.0という、日本の観測史上最大規模の超巨大な地震だった。アメリカ地質調査所（USGS）によると、この地震の規模は、1900年以降、世界でも4番目の大きさであったとある。

本震による震度は、宮城県北部の栗

- 平泉町、普代村
- 久慈市、野田村、
- 二戸市、一戸町、
- 雫石町、葛巻町、
- 岩手町、軽米町、
- 紫波町

——であった。その後、4月7日には宮城県沖を震源に、震度6強の最も大きい余震が発生している。

首都圏では、交通機関が不通となつて乱れ、多くの帰宅困難者であふれた。帰宅がかなわなかった人々は、勤務先やホテルなどで夜を明かした。東京都の発表によると、この日は緊急の収容施設として都の関係施設や都立学校などを開放。およそ9万4000人が利用した。また、関東では東京をはじめ茨城や千葉、埼玉、神奈川県

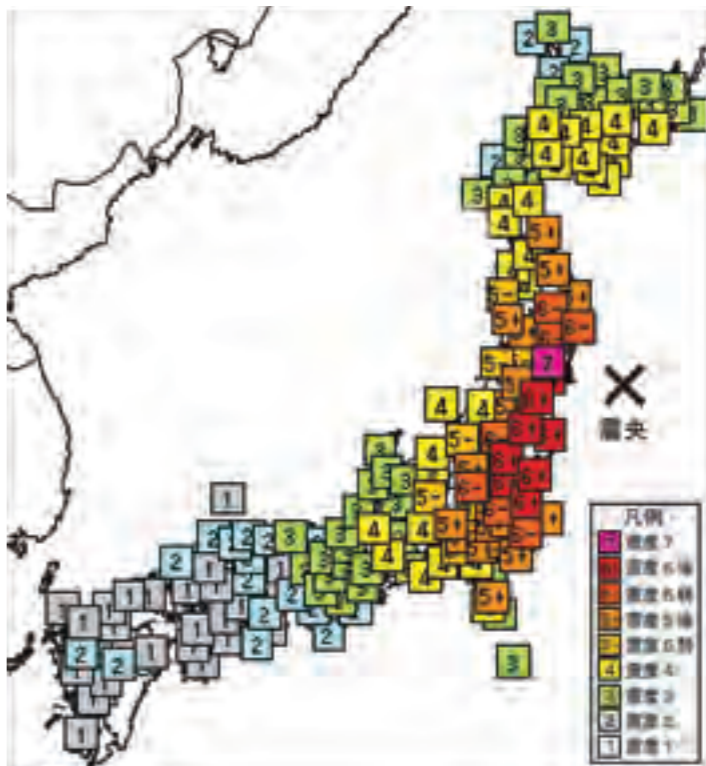


津波観測状況 気象庁技術報告第133号 平成23年（2011年）「東北地方太平洋沖地震調査報告」より

原市で最大震度7が観測されたほか、福島県や茨城県、栃木県で震度6強、また首都圏でも震度5強が観測され、北海道から九州にかけて広い範囲で揺れが観測されている。

岩手県内での震度は、  
震度6弱 大船渡市、釜石市、

震度5強 宮古市、山田町、盛岡市、八幡平市、北上市、遠野市、金ヶ崎町、住田町、



東日本大震災の震度分布図 気象庁技術報告第133号 平成23年（2011年）「東北地方太平洋沖地震調査報告」より

広い範囲で液状化現象が起こり、マンホールからは砂が噴出。一時、ライフラインがストップする事態も発生した。

北海道南部から神奈川県に至る広い範囲で、東日本の太平洋側に未曾有の大津波が襲来。国土地理院によると浸水した範囲は青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の6県62市町村。三陸沿岸では、福島県相馬市で9.3メートル以上、岩手県宮古市で8.5メートル以上、岩手県大船渡市で8メートル以上、宮城県石巻市鮎川で7.6メートル以上などが観測された。岩手・宮城・福島県の3県には午後2時49分、津波警報（大津波）が発表された。

山田町では、激しい地震の揺れが長く続き、屋内ではさまざまなものが散乱。しかし、本当の意味で三陸海岸の美しいこの町と人々の穏やかな日常が壊されていく恐怖は、揺れの後に襲ってきた巨大な津波によって引き起こされた。

最大震度5強（大沢地震計）を観測した山田町での津波到達時刻は地区によって異なるが、3時22分ごろ、最大級の第1波が到達した。地区の中では船越湾側の小谷島が最も早く、最も遅かったのは山田湾内の山田地区だった。波高は大沢地区約6メートル、柳沢北浜地区約7メートル、山田地区約

7メートル、織笠地区約8メートル、田の浜地区約19メートル、大浦地区約9メートル、小谷島地区約17メートルとそれぞれ記録されている。

内陸につながる国道45号はがれきで寸断され、進む道をはばまれた山田町では大火災が発生した。流出した船舶や車のガソリン、プロパンガスなどに次々と引火して燃える津波火災である。火の手が上がっているのに道路の寸断や水道管の破損等で十分な消火活動が行えず、JR山田線陸中山田駅周辺の町中心部が広い範囲で焼失した。田の浜地区の火災では、住民が津波火災から避難したところ、周辺で発生していた林野火災のため、自衛隊のヘリコプターによって山田高校に再避難した。

警察庁のまとめによると、令和2年（2020）3月1日時点で死者は1万5899人、行方不明者は2529人。うち岩手県の死者は4675人、行方不明者は1112人。いまだ57人の身元が分かっていない。

平成30年（2018）11月13日に発表された山田町の死者は824人、行方不明者1人。全半壊家は3167戸（平成24年6月1日現在）に達し、あの日、人々の尊い命と築き上げてきた町が瞬く間に奪われたのである。

# あの日起きたこと

発災から9年を迎えた令和2年（2020）、世界的に流行し拡大を見せた新型コロナウイルスの影響で参列の制限はあったが、「東日本大震災・大津波 山田町犠牲者九周年追悼式」が午後2時半から行われた。

あの時に生まれた子どもは9歳になり、小学生だった子どもが成人式を迎えている。その年月とともに過酷な状況や不安の中から、励まし、支え合って少しずつ前を向いて復旧・復興に進んできた。

前に進んでいく。振り返らない。それは大切なことである。

しかし、犠牲になった人たちがふると山田から離れていかなければならなかった人びとの思いを重ねるときに、この震災を風化させてはならない、忘れてはならない。

あの日、山田湾の美しい景色、海の輝きは、いつもと変わらない姿を見せていた。職場にいた人、訪問先にいた人、家族の送迎に車を走らせていた人、授業中だった人：人びとの生活もいつもと変わらない日常の中にいた。それは、そんないつもの日常をあまり

に突然に襲ってきたのである。平成23年（2011）3月11日午後2時46分のことだった。

立っているのも困難なほどの揺れは、ゴーツという地鳴りとともに襲ってきた。本震の後も大地を揺らす大きな余震が続いた。停電になり、携帯電話もつながらない。一人でいるお年寄りや体が不自由で動けない家族と連絡が取れなくなった不安から多くの人は、職場や移動先などから急ぎ家に戻っていった。

震度5強を観測した山田町では、直ちに災害対策本部が設置された。2時59分には大津波警報が発表された。家に向かう多くの人たちは、町の防災放送が伝える「予想される波の高さは3メートル」というアナウンスを聞いている。しかし、それまでも幾度も津波を経験している町の人々は、「3メートルなら防潮堤を越えることはないだろう」と思ったのである。ところが現実とは違った。時間を追って見てみると次の通りであった。

午後	三陸沖でマグニチュード9
2時46分	の地震が発生
2時59分	大津波警報発表 全町に避難指示発令
3時17分	船越地区で津波が水門を破る
3時22分	山田湾湾口から4〜5メートルの波を確認
3時24分	山田地区で津波が防潮堤を越える

海を眺めていた人は、「異常なほど静かな海を感じて不思議に思った」と証言している。山田伝津館制作の「実写岩手県版 これが巨大津波だ」のDVD映像でも防潮堤を越えるまでの波は、これが津波だろうかかと目を疑うほど、静かに思える。しかしその一方で、オランダ島と小島に目をやった人には、200メートルほども離れているはずの2つの島が陸続きに見えていた。津波前の引き波で海底が露出していたのだろう。「これはとてつもなく巨大な津波がくる」そう思った瞬間であったという。

やがて、高台や指定避難所に避難が始まった。静かに見えた波が牙をむいて、黒いカーテンのような高い波が港に押し寄せてくる。あつという間に水かさが増して湾の中に注ぎ込み、港は水没。押し寄せる波と引き波で停泊し



堤防を乗り越え町へ流れこむ津波



住宅が密集していた地域もがれきの山に



山田湾の引き潮の様子。小島周辺の岩が露出している

ていた船は渦を巻き、家と家がバリバリと音を立ててぶつかり合っていて、ものすごいスピードで海へ持っていかれるのである。高台に避難した人たちはその光景を「早く逃げろー」「もつと大きいのが来るぞー」「明治の津波以上

だ」「町がなくなる」「口々に叫び声を上げ、なすすべもなく見ていることしかできなかった。あちこちから流された車のクラクションが鳴り響き、指定避難所への避難途中に波ががれきとともに押し寄せ、全

身に水をかぶりながら必死にもがきながら逃げる。襲いかかるように町に海水が流れこみ、建物の2階も瞬く間に浸水。波にグルグルもまれながら漂流をはじめ建物たち。水流に逆らうことなどできない地獄絵図だった。

山田町は、津波による被害だけではなく、津波火災の悲劇にも見舞われたのである。3時25分、田の浜と織笠で、3時30分には八幡町と長崎、大沢新開地で火災が発生した。津波で押し流されたがれきの山が大規模な火災を引き起こした。津波火災によりどんどん火の手の勢いが増していくが、がれきなどで道がふさがれ、さらには水源地も壊されたため配水池にくみ上げられていた水もなくなった。消火活動がままならず3日間燃え続けたのである。



がれきの中ら出火し炎が上がりはじめる

停電し、暗闇の中にオレンジ色に光

るその炎が爆発音とともに響き渡って火柱が上がる。大きくなる火と音が恐怖をあおり、逃げ込んだ人は「まるで夢を見ているようだった」と眺めていたという。

役場に炎が迫った八幡町では、保健センターや中央公民館などに避難していた1000人以上が豊間根地区の避難所へ、また山田中学校の避難者は、山伝いに迫ってくる火災の延焼の恐れから、山田高校体育館へ夜半に再避難をしている。

住民の安否が不明だった田の浜地区では、100余人が地区の山上にある日蓮宗瑞然寺の修練道場に逃げ込んでいたが、津波直後の火災が山林に延焼していた。炎にはばまれ孤立していた地区に、アマチュア無線の資格を持つ山田町消防団第2分団の団員によって「火災が迫っている。救援を頼む」のメッセージが発信され、町の対策本部が自衛隊にヘリコプターによる救助を要請。山田高校などの避難所に搬送されたのである。12日午前3時35分のことだった。

いったい何が起きているのか。状況のみ込めない中に少しずつ、明らかに津波被害の現状。町では、混乱のうちにも迅速な対策を打ち出していった。



火災は自動車のガソリンなどに引火し、深夜になっても延焼し続ける

### 3月11日

- 午後 豊間根支部へ炊き出しを依頼
- 3時39分 依頼
- 4時55分 航空自衛隊に消火要請
- 5時28分 消防団全部車両消火出動要請
- 9時25分 山田地区への最初の炊き出しが荒川地区から到着
- 9時39分 自衛隊から物資提供
- 11時18分 道路復旧のため町内業者の重機が間木戸林道で待機

### 3月12日

- 午前 役場周辺へ火災が延焼、中央公民館などの避難者を豊間根地区へ移動開始
- 2時23分
- 6時11分 境田地区で山林火災
- 8時6分 自衛隊がヘリコプターによる空中からの消火開始
- 11時45分 山田道路・船越〜柳沢間復旧
- 午後 旧タブの木荘から山田高校へのヘリコプターによる避難者搬送開始
- 2時41分
- 3時17分 大沢・柳沢間の国道復旧

停電、ライフラインの遮断、電波基地局の破壊などによって情報が得られず、大切な家族や友人、知人たちの安否すら確認できないままに夜を明かさなければならなかった町民たち。津波や火災により800人以上の尊い命が失われ、家屋の被害も全壊2789戸、半壊187戸、一部損壊120戸。

町の基幹産業である漁業関係では、登録漁船2138隻のうち1590隻ほどの船が流失し、養殖施設や作業小屋のほとんどが壊滅的な被害を受けた大震災である。その現実を受け止め、向き合っていかなければならない日々の苦悩がここから始まっていくのである。



漁港から数十メートルも流されて打ち上げられた漁船



石油ストーブで暖を取りながら苦しい避難所生活が始まる

# 絆 つながり たすけあい

第一波襲来時、家に残った家族の安否。あるいは仕事や学校でその瞬間、離れ離れにいた家族の行方。連絡が取れずに不安の中に過ごす人々がどれだけいたのだろうか。

地震直後から、地元の警察や消防、自衛隊などの各機関では生存者の救いや行方が分からなくなっている人たちの捜索を行ってきた。

宮古警察署山田交番の所員たちは、役場で情報を収集。防潮堤からの潮位の確認やパトカーによる避難の呼びかけなど、まだ余震が続く中を避難の誘導のため各地区へと向かった。「大津波警報発表」のアナウンスが流れる町内をパトカーで国道45号に向かった所員は、「大津波警報が発表されました。急いで高台に避難してください」と繰り返し伝える。しかし、2日前に起きた強い地震による津波の被害がなかったことから、今回も大丈夫だろうと思う人もいたという。そうした影響から防潮堤上で海の様子を眺める人、あるいは写真撮影をして避難しようとしぬ人などの姿もあったため、所員たちは、何とか避難を促し続け

た。「津波が来た」と国道を走ってき

た住民の声に、危機を感じ一般車両の町内進入を禁止し、直ちに交通規制を行った。無線で現状報告をしようとしても、沿岸各署からの津波の到達を知らせる無線が止むことなく入るため、こちらからの無線を送ることもままならなかった。

また防潮堤での潮位変動の観測と報告にあたった所員も、避難誘導には苦



過酷な状況の中捜索を続ける警察官(愛知県警察)

労をした。防潮堤から山田湾を見渡すと、岸壁際の海底が見えるくらい潮位が引いている。「津波が来ます、逃げてください」と叫び続け、避難誘導に応じない人たちの手を強引に引きながら避難をさせた。倒壊した家屋からの救出にも当たった。すぐそばまで火の手が迫ってくる現場での救出もあった。救い出すために必要な道具などない中での救出劇が町内の至る所で展開されていたのである。そこには、一人ひとりの所員の心に「絶対にこの人を助ける」「一人でも多く救出する」という警察官としての使命感があった。

町の消防団は、延焼する火災の消火活動と担当地区の捜索に当たった。町中ががれきで埋め尽くされている。そのがれきを一つ一つ手作業で取り除いていかなければならなかった。町は停電し明かりがない。夜はあたりを警戒しながらくすぶり続ける火の消火を行い、翌朝、日が昇ると行方不明の人たちの捜索活動に従事。団員の中には当然のことながら被災者もいる。それでも活動を続けたのは、「大切な町を自分たちの手で守りたい」との思いからだ。

山田消防署の署員たちは、火災が鎮火すると救急活動が中心となった。3月11日から4月9日までのおよそ1カ月に行った救急搬送は、通常の3カ月津波から難を逃れた人たちもまた過酷な状況下に置かれていた。

地震発生直後の町内は、大規模停電や断水、通信網の遮断や交通網のまひなどで相当な困難が発生していた。このような状況にあつて、後方支援基地として大きな役割を果たしたのが津波の被害を直接受けなかった内陸部の豊間根・荒川地区であった。荒川婦人防火クラブ、石峠ミセスクラブなどの組織がある。町の災害対策本部はすぐさま炊き出しの要請を行い、多くの町民が避難している避難所に炊き出しが開



仲間と協力し合いながら横倒しとなった車を確認する消防団員

分に相当する162件。道路がふさがれ、宮古市まで片道3時間近くかかることも少なくなく、休息も満足にとれない過酷な状況が続いた。こうした中を他県からの応援を受けて、救援活動を続けたのである。

大掛かりな救出・捜索活動には、陸上自衛隊第9特科連隊、航空自衛隊北部航空方面隊などが駐留して当たった。活動の妨げとなるがれき等の撤去作業に大型の重機が多数投入され、倒壊した家屋に閉じ込められている人た

豊間根地区の避難所には、火災から逃れてきた山田地区の住民が多く避難してきた。ここでは豊間根、荒川地区にある9つすべての自治会を中心にそれぞれの家庭から米や梅干し、のりなどを持ち出し、ご飯を炊いた。白米が無くなるると発電機で精米機を動かして、玄米を精白した。深夜まで炊き出しは続き、おにぎりは初日で1926個にも上り、毎日続けられた。長期化する炊き出し支援で困ったことは、田植えの時期が迫ってきたことであった。こ

始された。



航空自衛隊員による捜索活動



ヘリコプターを使った自衛隊の支援活動

ちの救出や行方不明になっている人たちの捜索に当たったほか、食料や水、毛布などを避難所へ運んだ。また医療班の派遣や給水、風呂の設営を行うなど支援は多岐にわたった。

横倒しになった車に人はいないか。海中に沈んでいるがれきの中に不明者がいないか。その捜索には自衛隊員だけではなく、民間団体の協力もあった。

自衛隊による支援は、給食支援11万食、入浴支援の利用者4万4000人、救援物資は大型トラック650台というものであった。

7月まで続いた支援。7月12日に行われた陸上自衛隊に対する感謝の会では、陸上自衛隊第9特科連隊長の小林栄樹一等陸佐が「派遣活動を通じ町に親しみが湧き、古里に対する愛着のよ



震災直後から炊き出しを続けてくれた陸上自衛隊の皆さん

の地域は町内でも農家が多い地区で、米をつくる準備を始めなければならなかった。そこで考えられたのが避難生活をしている人々たちによる炊き出しの協力であった。中高生なども協力し、みんなでおにぎりづくりが始まると、次第に避難をしている人々の表情が明るくなっていった。この炊き出しは、あらゆるライフラインが絶たれた人びとの命をつなぎ、希望につながる一歩となったのである。

人が生きていくうえでなくてはならない水。供給には県内市町村をはじめ、長野県や京都府、大阪府、兵庫県、秋田県の市町職員が給水車で給水を行った。全面復旧にはおよそ2カ月を要した。

国道や県道の封鎖により、医療機関までの移動に支障をきたしたことから、山道に待機させていた豊間根地区の建設業者が重機で道を切り開き、う回路を造って人が人などの搬送時間の短縮に尽力した。しかし、町内の病院や診療所が被災したため、町内診療所の医師らは、山田南小学校（当時）避難所で救護所を立ち上げ、けが人や不調者の手当てに当たった。

その後、全国各地から医療チームが続々と町内に入り、このほかにも山田高校などを拠点として各避難所の救護活動を実施した。

善意のボランティアも忘れてはならない。4月9日、山田町災害ボランティアセンターが開設。全国から多い日で300人以上集まる日もあった。土砂の撤去や写真の洗浄、家具の移動、食器の洗浄などを手伝ってくれた。中でも思い出が刻まれている写真の洗浄は人びとの心に、前を向いて生きていく光を与えた。

被災した町民の力になりたい、助けたいという多くの支援の心に支えられて、震災直後の絶望から少しずつ笑顔を取り戻していった山田の人びと。震災発生から5カ月の8月11日、山田漁港でLIGHT UP NIPPON主催の花火大会が開催された。夜空を彩る花火は、亡くなった方々への鎮魂であると同時に、生き残った人びとの希望でもあった。過去幾度も津波の大災害を乗り越えて刻まれてきた山田町の歴史を振り返りながら、今回の大震災も町民が力を合わせ、絆を深めていった時には必ず乗り越えられる、そう信じて空を見上げていたのではないだろうか。被災した店舗の修理や、新たなプレハブでの営業再開に向けて立ち上がり歩み始めた山田の人びとの姿がそこにあった。

花火会場には、全国から寄せられた「がんばろう」「復興」と書かれた短冊が、風に揺れていた。



大浦出身の小林すずさんが所属するわらび座が大浦小で公演



保健センターで行われた航空自衛隊の演奏会



柳沢地区国道45号沿いに立てられた感謝を伝える看板



みんなを笑顔にさせた山田邦子さんの訪問



大沢小で笑顔を見せるラサール石井さんと子どもたち



復興の願いを込めた山田漁港での花火大会

# 津波の爪痕

津波常襲地帯といわれる三陸沿岸。

山田町は、過去に襲われた明治三陸地震津波の被害に学び、長い年月と多大な費用を投じて災害に備えて大規模な防潮堤を造ってきた。しかし、東日本大震災・大津波は防潮堤をいとも簡単に越えた。それは越えただけでなく、巨大なコンクリートの防潮堤をなぎ倒して、住宅や施設をのみ込んでいった。

どれくらいの間隔だったのだろうか。津波が引き、収まりを見せた時、そこにあった町のほとんどは無くなり、壊滅していた。

町民の足であるJR山田線は線路や鉄道施設が流失。国道45号をはじめとする道路も各地で寸断。交通網が遮断された。

建物、施設についても大打撃を受けた。警察、消防施設が被災し緊急活動や消火活動に支障をきたしたほか、漁港、水産加工場、市場などの水産関連施設等も全壊。船越小学校や介護老人保健施設、医療施設のみ込まれた。

家屋については、豊間根地区を除く沿岸地域の家屋のうち45・8%が全壊

し、大規模半壊や一部損壊までを含めるとおよそ55・8%が被害を受けた。

人的被害も甚大であった。震災から3カ月ほどの平成23年（2011）6月28日時点で被災前の人口の約4%が死亡・行方不明となった。

しかし、これらはライフラインや交通網、建物といったいわば目に見える物の被災状況である。あの日、大地が大きく揺らされ、人々は心も被災しているのである。

“高台を目指して走って逃げた。”自宅で波にのまれながら奇跡的に助かった“生かされた命”である。しかし、“助かった”人であっても生き地獄を見たのである。

大切な人や町、財産を失った喪失感、また地震と津波の恐怖感などが原因となって起こる心の不調、震災ストレスに襲われる人々が急増した。もつともなことだった。

小高い場所に避難しホッとしたところを背後から津波に襲われて流された。流れてきた家につかまって、何度も泥をのんだ。時々意識が薄れ「このまま死ぬんだ」と迫りくる死の恐怖に耐えた。あの日、波にのまれて自分は死ぬんだ、と思った恐怖を体験した人、また家族や近所に住む人と手をつなぎ波に翻弄されながらいつしかつないだ手が離れ、「一緒にいた人を助け



国道45号沿いの店舗



山田湾方面を望む

## 大沢地区



山田町ふるさとセンター付近



郵便局の屋根に乗り上げた漁船



被災し火事で焼けたJR山田線陸中山田駅

## 山田地区



JR山田線の線路上にひっくり返った燃料タンク



前須賀から荒神方面を望む

## 船越・田の浜地区

この震災では、町民同士が声を掛け合って高台避難をし、危険を顧みずに手を握り合いながらかぶる津波の中を避難した、そんな場面が多くあった。町民の心底にある「励まし合い」「助け合い」という絆によって、この気の遠くなるほどの難局を乗り越えて行けるものと信ずるのである。



船越小付近



船越湾漁協周辺

## 大浦地区



崩壊した大浦漁港



被災した小谷鳥地区



被災した大浦地区

震災直後から、全国各地、また世界の国々から大きな支援と励ましをいただいた。岩手県の事業が、雫石町の協力により実施された。山田町からの受け入れを表明していただいた、繫温泉清温荘、ホテル安比グランド、鶯宿温泉長栄館、ホテル森の風鶯宿、雫石プリンスホテル、松川温泉松川荘には、3月末から8月末まで、町内20カ所の避難所等から352人を受け入れていただき、一時的な避難場所としての提供以外に、被災者を心身ともに癒やしていただいた。

「発災後、早急な取り組みが求められた事業のひとつとして、被災者の一時的な住居の確保、生活再建の足がかりとするための「応急仮設住宅」の建設があった。6月時点で避難所に避難していた人の数は2076人。避難所以外にも知人宅や親戚宅に身を寄せている人も数多くいた。

町は県と協力し、建設場所の選定や地権者との交渉に奔走、発災直後の3月末から建設に着手し、8月中旬頃に46団地、1940戸を完成させた。

応急仮設住宅の建設までの期間、被災者に対して多くの支援をいただいている。その中でも、内陸部の宿泊施設へ被災者を一時的に受け入れてくれる

岩手県の事業が、雫石町の協力により実施された。山田町からの受け入れを表明していただいた、繫温泉清温荘、

ホテル安比グランド、鶯宿温泉長栄館、ホテル森の風鶯宿、雫石プリンス

ホテル、松川温泉松川荘には、3月末から8月末まで、町内20カ所の避難所

等から352人を受け入れていただき、一時的な避難場所としての提供以外に、被災者を心身ともに癒やして

いただいた。

## 織笠地区



津波で流されたJR山田線の織笠鉄橋

大きな町は全力でライフラインの復旧に努め、がれきの撤去等で道路を確保、住まいをなくした人たちの仮設住宅の準備、基幹産業である漁業関係の再開、雇用の確保など困難に立ち向かってきたが、こうしたハード面はも

とより、震災で受けた心のダメージをも復興させていかななくてはならない。気が遠くなるほどの取り組みである。しかし、町も人も復興していかなくてはならない。それが生かされた側の役割である。



被災した織笠川鮭心化場付近



織笠大橋・山田湾を望む

# 仮の暮らしから復興へ向けて

東日本大震災直後、町では事業再開のめどや雇用の場の確保などはおろか、5600人(最大)以上の町民が避難所生活を強いられていたが、震災から2カ月後の5月23日、町は復興に向けた計画策定の基本方針を取りまとめ、7月1日、復興の基本的な考え方をまとめた「山田町復興ビジョン」を公表した。

1年後の平成24年(2012)3月2日、町は復興計画の高台移転事業について事業化に向けた着手式を実施、復興整備事業をスタートさせた。これは町と独立行政法人都市再生機構とで行う事業で、岩手県・宮城県・福島県の被災3県17市町村への復興支援であるが、事業に着手したのは山田町が初めて。着手式において沼崎町長(当時)は「復興に向けた槌音を響かせることができ、励みになる」と述べた。

3月15日には三陸沿岸道路全線開通に向け、三陸沿岸道路の用地幅杭設置式が行われた。山田道路は震災時に物資や救急搬送に利用され「命の道路」と呼ばれた。全線開通によって、より三陸沿岸の発展を支えていく道路に

なる。

震災前、日本一の生産高を誇っていた山田の特産品「殻付きカキ」。震災によってカキ養殖施設が軒並み流失し、船や道具などすべてが失われた生産者と観光協会は営業の再開に向けて踏み出した。その一歩は「三陸山田かき小屋」の復興である。

養殖作業をはばむがれきの撤去、失った船や道具など問題は山積。しかし、こうした問題を一つ一つクリアしながら、平成23年内の再開を諦め営業を停止していた山田かき小屋が10月29日、船越地区浦の浜に再オープンした。初日には待ちわびていた人たちが蒸し上がったカキを堪能。ゼロ、いやマイナスからのスタートには、関係者の復興に向けた並々ならぬ思いがあったのである。

また、これからの山田町を背負っていく子どもたちが安心して学べる場所「山田町ゾンタハウス」が開所された。これはNPO法人「こども福祉研究所」の森田明美理事長が長崎地区に設立。震災後、仮設住宅やさまざまな環境の変化にともなって、子どもたち

が勉強する場所をなくしているという現状に差し伸べられた希望の手であった。

津波の影響でダメージを受けた建物を町民と東洋大学の学生たちがボランティアで復旧。夏休みには大学生たちが学習の支援まで実施した。東洋大学教授でもある理事長の森田さんからは「日本中、世界中には君たちを支えてくれるいい大人たちがいっぱいいるから希望を失わないで」というメッセージが送られた。ここでは物質的な支援だけでなく、大人が子どもたちに希望を与え続ける場所として、地域の中

から支援のエネルギーが生まれる環境づくりが行われたのである。

(2020年8月31日をもって活動を終了)

一瞬にして日常が奪われたあの悪夢から一年。

3月10日、船越地区浦の浜で、「弥生灯火会」が行われた。震災直後「ともしび」が戻ってくる度に多くの人々が復旧への手応えと希望を感じたことにちなんでの灯籠流しである。町内の保育園児が描いた置き灯籠は、温かな光をともしながらゆらゆらと海に揺れる。参加者は流し灯籠にどんな思いを

込めて流したのだろう。

11日には、町の中央公民館大ホールで、「東日本大震災・大津波山田町犠牲者一周年追悼式」が行われ、遺族代表の木下文(当時鈴木)さんは「大震災から1年たった今も大切な人を失った悲しみと心の傷が消えることは決してない。でも、前に向かって強く歩まなければいけない。一日一日を大切に生きて行く」とメッセージを述べた。

また「御蔵山」と呼ばれる旧町立図書館跡地では山田ロータリークラブ(阿部幸榮会長・当時)が犠牲者の冥福と復興への願いを込めて建立した

「鎮魂と希望の鐘」の除幕式が行われ「この鐘は復興の証。たくさんの人にこの地を訪れてほしい」と述べた。

この日、町の各所では犠牲になられた方々へ追悼の祈りがささげられた。「災害は忘れたころに」と言われるが、忘れてはいけない、忘れられるはずがない。しかしその一方で、何もなかった土地には新たに仮設店舗が並び始め、少しずつ前を向いて歩きだしていることもまた現実である。

未来へのメッセージに寄せた山田中学校(当時)の湊安里さんは、「今日から復興事業が始まることを知り、いよいよ前に向かって進んでいくことができるんだ、ととてもうれしく思っています。震災前の山田のように、みんなが明るく、楽しく、支え合って暮らしていける町、地震や津波に負けない強い町になってほしいです」と伝えている。

町では、生活再建に向けたさまざまな取り組みが、長い年月積み重ねられていくことになる。復興における町の永遠のテーマは、「二度と津波による犠牲者を出さない」。何よりも津波から命を守る町づくりを目指し、町民一人ひとりが主体となって、全町民で取り組んでいく、それが山田町の復興なのである。



東日本大震災・大津波山田町犠牲者二周年追悼式



「鎮魂と希望の鐘」の除幕式



「弥生灯火会」で行われた灯籠流し



## おらいの船と夕焼け

私の実家の船と夕焼けを写した一枚です。

勝運丸といいます。

東日本大震災の津波で被害を受けたものの、修理して今も活躍しています。

私は、現在、漁業の手伝いをしています。

この船は東日本大震災からの復興、再建のため走り続け、

これからも私たちと漁業を頑張り続けます。

こばやし ひでと  
小林 秀人 (山田町船越 20代)

撮影日 2014年9月18日

場 所 大浦漁港